

された時、月代さかやきも剃らず、着流しの伊達姿に、容態不敬ということで切腹を命じられ、蜂須賀家三田屋敷で切腹した。わずか二歳の長男も翌日切腹を命じられた。十郎左衛門三十二歳、万五十五歳であった。母方や姉妹たちはお構いなしであったが、弟又八郎は蜂須賀家の国元へお預けの身となり、一家は徳島へ下った。おそらく、一家が徳島へ移住できたのも敬台院の尽力によると思われる。敬台院は孫十郎左衛門と曾孫の切腹にどれほど胸を痛めたことであろう。

寛文六年一月四日、敬台院は七十五歳の生涯を閉じた。敬台寺に葬られ「敬台院殿妙法日詔大姉」と墓碑銘された旧墓と、平成六年（一九九四）に開創三百五十年記念として建立された新正墓が敬台寺の裏山の登り口に凜然として立つ。

総本山大石寺の御影堂裏には敬台院と娘芳春院（池田忠雄妻三保）、孫の現寿院（次女万の娘六）の墓に並んで敬台院殿供養塔が建つ。正法寺には敬台院の位牌と肖像画が所蔵されている。絹本けんぽん着色ちやくしやくのものので片膝を立て茶色の法衣を纏い気高さを感じさせられる坐像である。

敬台院は、幕藩体制の要である大名統制の確立期に、江戸から遠く離れた徳島の大名家に嫁ぎ徳島藩の存続に尽力した。藩主が若くして世を去ったため三代の藩主を守り、幕末まで国替えもなく続いたゆるぎない藩の基礎を固めた。力と頼る父母や子どもたちに先立たれたにもかかわらず、多くの困難を乗り越えたのは大石寺門流に深く帰依した信仰生活があったからであろう。藩のためには將軍の養女という立場を用いて、財政的にも、幕府の要人を動かすことも再三行った。藩内にいくつもの寺院を建立し、一族の女性や庶民たちの心の安泰に尽くしたのみならず、敬台院は、藩の枠を超え大石寺門流のためにも大きく尽力した。

平成二十七年（二〇一五）は敬台院の三百五十遠忌であった。